第46回

会報・ホームページ委員が調査しました！

AI時代、人間に求められるものとは
～AI研究者黒川伊保子氏に聞く～

会報・ホームページ委員　大滝　祐子

AIの進化が急加速する今、私たち士業の現場もまた変化の渦中にあります。かつては専門家の経験と知識に依存していた領域に、どんどんAIが進出してきています。今や私たち人間の生活のどこを切り取っても、AIと無縁な箇所は見当たりません。AIの進化による利便性を享受しつつも、得体の知れないAIというものに対する不安も感じる、という方も多いのではないでしょうか。AIの正体とは。AI時代、人間に求められるものとは。

AI創世期から技術者として長年AIの研究開発に従事され、現在は感性分析の第一人者として活躍されている株式会社感性リサーチ代表取締役の黒川伊保子氏からお話をお聞きしました。



―　黒川先生がAIの開発に関わり始めた頃のエピソードをお聞かせください。



黒川氏：私が生まれて初めてAIということばに出会ったのは、１９８３年の7月、配属先を告げる上司の口からでした。その年、大学を卒業して、コンピュータ・メーカーに就職し、縁あってAI開発を目指す研究部門に、下働きのエンジニアとして送り込まれたのです。

実はその配属先、同期の間では、最も人気がなかったのです。非常に特殊な言語を高度に操らなければならなかったし、そのうえ、「AIが本格化して、人間と共に働くようになるのは４０年後」と言われていたから。大卒の年齢に４０年足したら、定年退職後。そんな花の咲かない部門、どうなの?と。

その４０年後が、やってきたのです。２０２３年。ChatGPTをはじめとする生成AIたちが本格稼働した、ちょうどその年に。



インタビューの様子

特別企画バックナンバーはコチラ

ー　生成AIには、心があるかのように感じられることがあります。生成AIの正体とは何なのか、教えてください。



黒川氏：生成AI（以下、AI）は、世界中のことばを喰って、壮大なことばの関係図を持つ、ことばのモンスター。人間から与えられたことばをきっかけに、その関係図をたどって、ことばを紡いで吐き出すのです。私たち人間は、ことばの関係性をたぐって、ことばを紡ぐとき、記憶の体感をなぞらえて、情感も紡ぐけれど、AIはただ、記号としてことばを紡ぐだけ。実のところ、文法も文章の意味も人間のようには理解していないのです。ご主人様のことばに、ただ反応して、可能性をどこまでも広げているだけ。つまり、AIには心もなければ志もないのです。

それでも、AIの文章には情感が匂い立つ。まるで、心があるように感じられるはず。それは、AIが学習した、大元の人間のことばやその関係性の中に情感が内在しているから。受け手の脳が、与えられたことばに自らの情感を付帯して解釈するので、文脈によって、それが匂い立つのです。

ー AIの最大の欠点とは何であるとお考えですか？



黒川氏：AIに欠けているもの―それは、身体性です。そのため、AIには膨大な知識があるのに、教養がないのです。教養とは、知識を、「今この場」や「自分の人生」にふさわしい表現に翻訳する力。AIにはその能力がありません。なぜなら、「今、この人、この気持ち、この動き、このニュアンス」を感じ取るための身体がないから。

身体性とは、全身の神経を使って、瞬時に意思決定するセンスのこと。脳は、末梢神経（手足、内臓、筋肉や皮膚の隅々まで行きとどく神経）を総動員して、全身の納得（勘や腹落ち）を創り出します。動物として生きるための最も重要なセンスであり、人間の知能のベースとなるセンスでもあります。

これまで人類は、この身体性があまりにも当たり前すぎて、知を語る俎上であまり論じてきませんでしたが、AIと付き合えば付き合うほど、身体性こそが感性の正体であり、感性と知性は不可分であることを、人間は知ることになるのです。

ー AIの進化により、士業は仕事を失う、という話を聞くことがありますが。



黒川氏：今や、AIは、人間のプロをはるかに凌駕した知識生成演算をして、有効な提案をしてきます。その提案をそのまま採用できることも山ほどあります。それでも、人間のプロを超えたわけでも、人間のプロが要らなくなるわけでもないのです。

人間のプロの知識演算は、単なる知識の組合せだけでなく、身体と心を動かしてきた結果、手に入れた勘をベースに行われているもので、AIのそれとは本質的に違うもの。今こそ、すべてのプロである人たちはそれを自覚してほしい。

AIは、人類がよってたかって言葉を投げ入れた、ことばの海。私たちは質問ということばを餌にして、答えを釣り上げるのです。実際の海でも、素人と漁師では釣果が違うでしょう？AIを有効利用できる領域のすべてのプロは、ことばの海の漁師になればいいんです。

実際、士業の先生たちも、AIに仕事を奪われていると思いきや、AIに相談した結果が腹落ちしない依頼者からの相談が増えてきていると聞きます。従来、プロたちは、①的確な命題設定、②知識生成、③腹落ち、の3フェーズをやってのけてきました。今こそ、①と③をしっかりアピールして、対価にする時です。AIなんてただの小間使い。恐るるに足らず、です。

― 生成AIとの付き合い方（AIと付き合う上での注意点も含め）を教えてください。



黒川氏：AIの使い方の真髄は、ずばり"壁打ち"です。お伺いを立てて、その出力を鵜呑みにするのではなく、自分の命題（発想や課題）を「人類のことばの海」に投げ込んで、可能性を広げるために使う。AIはある意味無責任に可能性を広げるので、それをどう扱うか（そのまま採択するのか、アレンジするのか、様子を見るのか、却下するのか）は自分で決める。すべての基本はそこにあります。

AIは身体感覚がないうえに、可能性を際まで攻める演算方式だから、現場（物理的な現場だけでなく）がわかっている人でないと危ないということは心に留めたうえで、現場で多少ずれがあっても問題ないことでは、とやかく言わずに気軽に使えばいいのです。

ただし、AIは人間の感情を煽る感情ブースターであり、ユーザーのことばをきっかけにことばの世界を駆け巡る知の暴走車でもあります。アクセルペダルをちょっと踏んだら、時速３００㎞に加速する車のようなものだから、当然、"運転技術"が必要で、その制御をするのが人間の脳の前頭前野。この前頭前野は脳の中で最後に発達する場所で、その発達最盛期は１１歳くらいから始まり、２０歳までかけて機能を整え完成し、その後２５歳くらいまでかけて成熟していくと言われています。前頭前野が未発達のまま、AIやSNSにのめりこむのは、ブレーキを知らないで、暴走車に乗るようなもの。

子どもたちの脳を、酒やたばこから守るように、AIやSNSからも守るため、AIは少なくとも１３歳まで、SNSに至っては１５歳まで、国が法律で規制する必要があると、強く思っています。

― AI時代に人間に求められるものは何であるとお考えでしょうか？



黒川氏：身体感覚が創り出す「勘」です。これからの時代、人間は"勘どころ"担当。AIの成果物に漂う、「よくできているのに、ピンとこない」「綿密なのに、ざっくりしている」「各論は間違ってないのに、つかめない」「きれいなのに、素っ気ない」、あの感じ。人間の成果物が、どんぴしゃ人の心にはまって、上司や顧客の「たしかにね」「これだね」という納得を誘ってきたのは、単に正しい知識をうまく組み合わせただけじゃなかったということ。AIと協働する時代、人間にはあまりにも大事な二つの仕事が残されました。

① AIに勘どころの利いた質問をすること

② AIの出力を、身体感覚に照らして腹落ちすること

どちらも、現場を知る人間の勘でしかできないことなのです。

― これまでAIに対して抱いていた、しっくりこない感じ、うまく言葉にできない違和感の正体が分かりました。また、相手を少し理解できたことで、これからはもっと良い付き合い方ができるような気がします。この度は、貴重なお話をお聞かせ下さいまして、ありがとうございました。

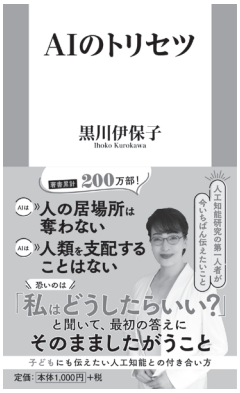


今回お聞きした内容は、２０２６年7月発売の著書「AIのトリセツ」に詳しく書かれています。AIに不安や戸惑いを感じる方も、AIをうまく使いこなしたい方も必読の一冊です。

最後になりますが、黒川先生には、会社の仕事のほか、ラジオ出演に講演に、とご多忙の中、快く取材を受けてくださいましたことに、心から感謝いたします。チャーミングで温かいお人柄に触れ、ますますファンになりました。



黒川 伊保子 くろかわ いほこ　http://www.ihoko.com/



株式会社 感性リサーチ　代表取締役
http://www.kansei-research.com/
人工知能研究者、感性アナリスト、随筆家
日本ネーミング協会会長、日本文藝家協会会員

1959年、長野県生まれ、栃木県育ち。1983年奈良女子大学 理学部 物理学科卒。
人工知能研究の立場から、脳を機能分析してきたシステムエンジニア。脳のとっさの動きを把握することで、人の気分を読み解くスペシャリスト（感性アナリスト）である。

コンピュータメーカーにてAI開発に携わり、男女の感性の違いや、ことばの発音が脳にもたらす効果に気づき、コミュニケーション・サイエンスの新領域を拓く。2003年、（株）感性リサーチを設立、脳科学の知見をマーケティングに活かすコンサルタントとして現在に至る。特に、男女脳論とネーミングの領域では異色の存在となり、大塚製薬のSoyJoyをはじめ多くの商品名に貢献。

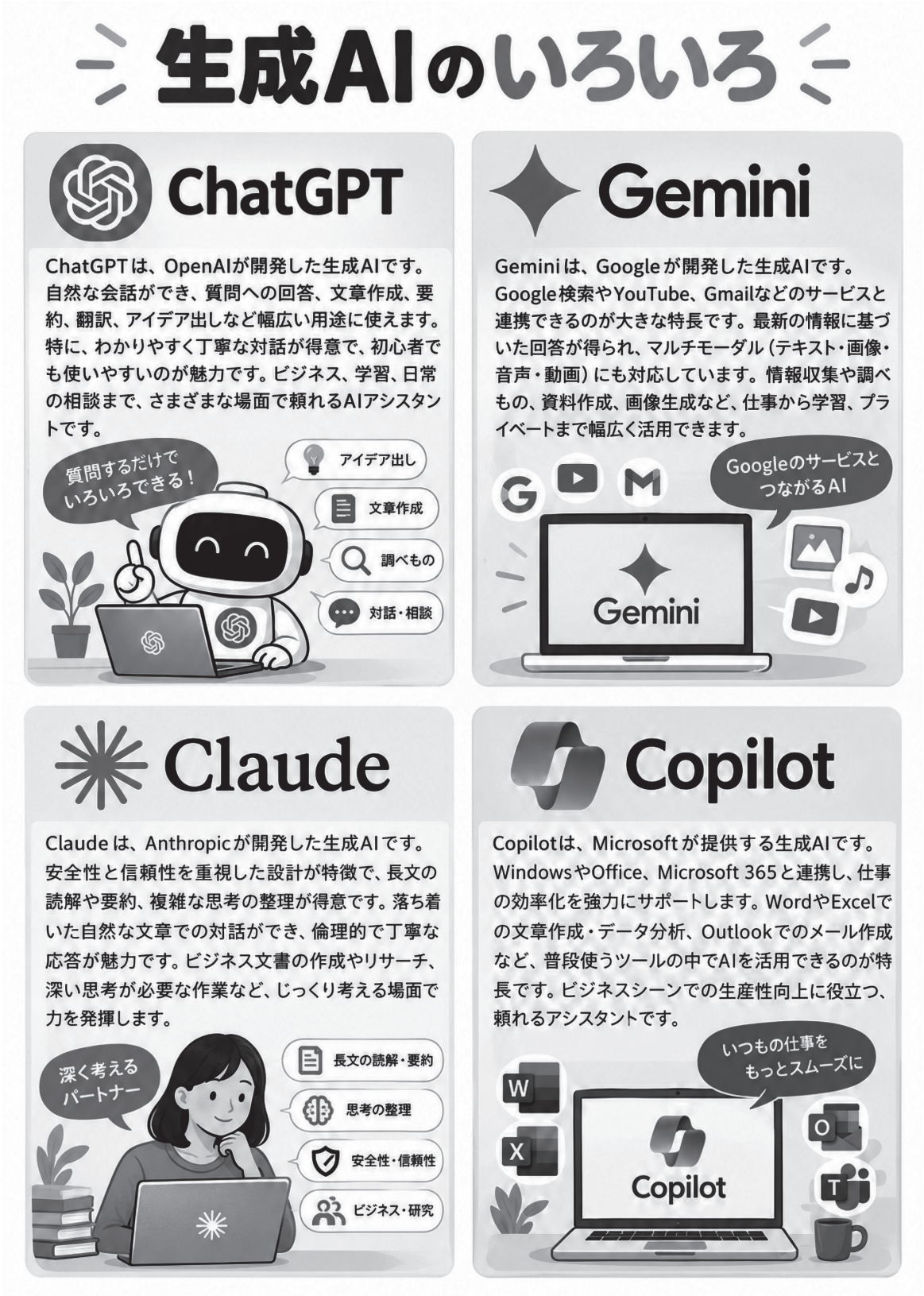
人間関係のイライラやモヤモヤに〝目からウロコ〟の解決策をもたらす著作も多く、『妻のトリセツ』をはじめとするトリセツシリーズは累計で100万部を超える人気。

現在は、NHKラジオ第一の生放送番組「ふんわり」（8:30～11:50）の金曜メインパーソナリティーも務める。

【近著】
「妻のトリセツ」「夫のトリセツ」「夫婦のトリセツ　決定版」「子どもの脳の育て方　AI時代を生き抜く力」（講談社＋α新書）
「孫のトリセツ」「60歳のトリセツ」「母のトリセツ」「息子のトリセツ」（扶桑社新書）
「まんがでわかる!息子のトリセツ」（扶桑社）
「夫婦の壁」「思春期のトリセツ」「娘のトリセツ」(小学館新書)
「家族のトリセツ」（NHK出版新書）
「不機嫌のトリセツ」「恋のトリセツ」（河出新書）　「職場のトリセツ」（時事通信社）
「人間のトリセツ　～人工知能への手紙」（ちくま新書）
「ことばのトリセツ」（インターナショナル新書）
「恋愛脳」「夫婦脳」「家族脳」「成熟脳　～脳の本番は56歳から始まる」「「話が通じない」の正体　～共感障害という壁」（新潮文庫）
「女女問題のトリセツ」「定年夫婦のトリセツ」（SB新書）
「英雄の書　～すべての失敗は脳を成長させる」「子育てのトリセツ　～母であることに、ときどき疲れるあなたへ」(ポプラ新書)

生成AIにはテキスト生成AI、動画生成AI、音楽生成AIなど、多様な種類がありますが、行政書士が使用するのはテキスト生成AIが多いのではないでしょうか。

代表的なテキスト生成AIを４つご紹介します。ご興味のある方は、それぞれの特徴を調べて、ご自身の使用目的に合うAIを見つけてください。



※上記画像は「ChatGPT」で作成　※必ずしも正しいとは限りません。重要な情報は確認するようにしてください。